

2015年1月30日

『日本人対朝鮮人 決裂か和解か』（永六輔・辛淑玉 対論集）を読んで

民族間の差別意識というものは、お互いの交流が頻繁になり、世代が変わり時がたてば、少しずつ良い方向に収束していくものと思っていた。

しかし、今日の日本におけるいわゆるヘイトスピーチやネットでの言動に接し、少なからず衝撃を受けている。日本人が、白昼堂々として露骨な民族差別を口にし、デモ行進をしている姿を見て唾然としたのだ。

たとえ相手からどんな挑発を受けても、日本人はもっと大人の対応をすると思っていたし、人権に関する意識は、戦後70年の民主主義を経て少しずつ進歩していると思い込んでいたからだ。

現在の日本の差別意識は、経済的格差の問題同様、以前よりも悪化しつつあるのではと思い、15年ほど前に読んだこの本を再読した。

出版の趣旨を永六輔氏は端的に説明している。

「努力して付き合うよりも、いっぺんお互いに言いたいことを言ってしまおう。お互い怒るかもしれないけど言っちゃってそれを一冊の本にまとめてみよう。そうすると本当に仲良くできるかもしれない」。

それに対して辛淑玉氏は、「日本人が朝鮮人に対して意味もなく謝ったり、迎合したりするのはその本質を見失う。日本人は言うべきことをきちんと主張すべきである」。そして、「無理して仲良くなる必要はないと思っているんですね。悪友みたいな関係が国際社会の中で一番安定性がある関係だと思うんです」と答えている。

また、辛淑玉氏は日韓の箸の使い方の礼儀作法の違いに触れ、「日本人は韓国に行ったときに意味もなく迎合する。これはやめたほうがいい。つまり多くの日本人

が韓国に行って箸を使ってバクバク食べて[何が悪い]って言った瞬間に初めて日韓関係は次のステップに行くと思う」として指摘している。

辛淑玉氏は単純に朝鮮人(ここでは韓国人のこと)至上主義の偏った視点にたって話をしているわけではない。それは次の発言で納得できる。「韓国人の反日は日本の南無阿弥陀仏と同じ。反日というのは、とりあえず意味もなくやるのがあの国のマナーだと思う」。

戦後 70 年も経つ今日においても、いまだにお互いの民族間の差別意識解消に大きな進展がみられないのは、実に歯がゆい。問題を将来世代に先送りし、臭いものに蓋をしても何の解決にはならない。

本来ならば 1910 年の日韓併合から 1945 年の終戦の間の 35 年間の当事者世代の責任において早期に解決すべきだった問題だが、解決されないままに残り、そしてほとんどの当事者は、今はこの世にはいない。

辛淑玉氏は「近代史をまともに学ぶことのない日本では、植民地支配を謝罪できない。音でゴメンナサイを出せてもきちんとした言い訳も言えない。だから反韓意識が生まれる」と指摘している。

これは、日本の歴史教育に問題があると思う。私たちの頃の中学や高校の歴史の授業を振り返ってみると、近代史をじっくりと教えてくれることはなかった。近代史は 3 学期のどん詰まりの方の授業で、ほとんど流す程度の授業内容であった。日韓併合という語句は知っていたが、それが日本と朝鮮にとってどんな意味をもっているのか、授業の中で先生が説明する意欲も時間的余裕もなかった。

焼き肉やキムチは、日常生活で親しんでいるのに、この本を読んで、いかに自分が二国間の歴史を知らなかったかを改めて気づかされた。

そこで、日韓併合以来のおよそ 100 年間の両国の最も基本的な歴史的事実を、辛淑玉氏の発言から要約してみると、

- ・ 1910 年の日韓併合で、朝鮮人は皆皇国臣民、日本人となった。
- ・ 1945 年の終戦で、皇国臣民から朝鮮人に復帰した。
- ・ 朝鮮戦争後、分断国家になると在日の朝鮮人も二つに分断した。在日の朝鮮人が韓国を名乗ろうが、朝鮮を名乗ろうが自由意思に基づく申し立てを日本政府は認めた。
- ・ 1965 年韓国だけが日本との国交を回復。そこで、手続きをした者が韓国籍を取得、しなかった者は朝鮮籍として今日に至る。

辛淑玉氏は「韓国籍を取得しなかった者の理由は様々であり、朝鮮籍だからと言って北朝鮮支持だとは言えない」と説く。

在日の朝鮮人の存在は日本、韓国、北朝鮮の三国の狭間にあって非常に複雑な立場にある。

辛淑玉氏は「例えば日本において、在日の韓国人は[韓国に帰っていない人]というだけで故国に帰ればちゃんと迎えられる人として勘違いされている」。「在日が北朝鮮支持か韓国支持のどちらかに組み込まれ一人の人間として理解されないし、在日がなぜ日本にいるのかを多くの日本人は理解していない」。在日朝鮮人の立場の複雑さを説明している。

私も多くの日本人同様、よく理解していなかったし、正直言って、それほど大きな関心もなかった。その理由は、私自身が差別する人間(マジョリティ)の側において、多分暗黙のうちに、優越意識を持っていたからだろう。

歴史の歯車は過去に戻すことできない。

お互いが過去の真実に正面から向き合い、徹底的に話し合っ、未来志向で付き合い合っ、行くべきだと思っ。

永六輔氏は未来志向の付き合いのために次のように述べている。「筋を通して謝罪しちゃった方がいいと思っんですね。ただ、謝罪という言い方、それに字も強烈なんですよね。で、僕は言い訳でいいと思っんです、筋の通った言い訳をするべきだと思っんですよ。・・・きちんとした言い訳をまずするべきだと・・・最初から謝ろうとするから、みんな無理がいつてるんですよ」。

両氏の対論における、率直な意見交換は国と国との関係にこそ求められる。多くの民族差別問題は、国家間の争いごとに端を発していることは、歴史が教えてくれる。

国そのものの引越はできないし、隣国関係は半永久的に続っ。お互いの国同士が揶揄し合っいたら、何も生まれない。

もっと国レベルでの交流の場を広範囲にもち、お互いが過去の真実に正面から向き合い、過ちは過ちとして認めて、未来志向で付き合い合っ、行くべきだと思っ。お互いが問題の解決に向けて努力しない限り、お互いの国民にとって不幸な歴史はさらに続っことになるだろう。